

日本ゴルフ協会の新たな活動を支える 「ゴルフ学芸員」

来年、創立100年を迎える日本ゴルフ協会。その節目に合わせるかのように、当協会はいま、新たな社会的使命を担おうとしている。そこに欠くことのできない「学芸員」とは？「ゴルフ学芸員」を志す宮井善一、井手口香の両氏に話を聞いた。



インタビュー：三田村昌鳳（JGAオフィシャルライター）

宮井 善一（みやい ぜんいち）

1965年 和歌山県生まれ。1989年 山口大学卒業、スポーツニッポン新聞社入社。校閲記者、前橋支局、サッカー担当記者を経て1997年からゴルフ担当記者。2004年 スポーツニッポン新聞社退社。フリーのゴルフライターとなり現在に至る。2018年10月 学芸員資格取得に向け必要な科目の履修を開始。2023年3月 学芸員に必要な科目の単位をすべて修得。

- ・日本プロゴルフ殿堂オフィシャルライター
- ・元世界ゴルフ殿堂選考委員
- ・日本女子プロゴルフ協会50年の歩み編集協力委員

井手口 香（いでぐち かおり）

1973年佐賀県武雄市生まれ。1996年、佐賀クラシックゴルフ倶楽部入社。2007年から都内のゴルフ場に勤務する傍ら、東京都ゴルフ連盟の競技委員として競技運営に携わる。2023年9月、玉川大学教育学部教育学科通信課程学芸員コース卒業予定。

三田村 「ゴルフ学芸員」。おそらくほとんどの方が初めて目にする言葉だと思います。それぞれゴルフ界で活躍されてきたおふたりが、この度「学芸員」の資格を取得。今後は「ゴルフ学芸員」の道を志しておられるわけですが、そもそも「学芸員」とはどのようなお仕事で、それがどうしていまゴルフ界に必要なのか。そのあたりをおふたりに説いていただこうと思います。まずは、どうして学芸員になろうとされたのですか？

宮井 そもそも三田村さんとこれからのゴルフ界を語るなかで、「ゴルフミュージアム」の重要性について触れられ、本来そこには学芸員が欠かせないという話になったことから興味を持ちました。

三田村 宮井さんはもともとスポーツニッポン新聞の記者で、過去の記録などデータの収集や分析に熱心でしたね。

宮井 子供の頃からスポーツの記録を調べるのが好きでした。スポーツニッポン新聞社に入り、1997年にゴルフ担当になったのですが、ゴルフは他のスポーツに比べて記録の整理が遅れていました。そこで、自分なりにコツコツ調べてきたのですが、歴史などを体系立てて整理するには、きちんとした資格や肩書を持って取り組むのが一番と感じたこともあり、学芸員の資格取得にチャレンジしたわけです。

三田村 取得までにどれくらいの時間がかかりました？

宮井 4年半くらいですね。僕の場合は仕事をしながら、全9科目中の8科目の単位を放送大学で、半期に1科目というペースで取りました。残る最後の1科目は「博物館実習」で、これは放送大学では取得できないので、筑波大学に入り直し、1年かけて取りました。

三田村 学芸員は国家資格？

宮井 そうです。ただし、任命権者から「学芸員」として採用されなければ、資格があるだけで「学芸員」とは名乗れませんけど。

三田村 井手口さんも本職は小金井CCのキャディーでありながら、東京都ゴルフ連盟で競技委員をやったり、メディアに記事を執筆されたりと多忙ですが、なぜ学芸員に？

井手口 私もきっかけは、三田村さんです（笑）。そもそも私が戦前のゴルフ場巡りが趣味で、歴史にも興

味があることを知って、提案されたと思っています。

三田村 歴史を語るうえで欠かせない「関東7倶楽部」の存在を知るや、伝手を頼りに全部プレーされたといった話を聞き、貴方の好奇心と行動力は放ってはおけない（笑）。

井手口 私は、小金井CCが「名門」と聞かされても、どこに「名門らしさ」があるのか分からない。それで「関東7倶楽部」の存在を知って、それぞれどんな倶楽部なのだろうか、行ってみたいと分からないと思って。

三田村 なぜ、戦前のゴルフ場に興味が？

井手口 きっかけは神戸ゴルフ倶楽部です。神戸は一回行くともう十分という人と、また行きたいという人に分けられると聞きます。私は後者で、何度行っても楽しい。それで、歴史を調べると、私は故郷の九州で雲仙をはじめ古賀とか、門司、別府といった戦前からあるゴルフ場に結構行っていることが分かりました。そこから、全国にある戦前からのコース全部に行けるんじゃないかと思い、詳しく調べ始めたのです。

三田村 いまあるのは何コース？

井手口 32コースです。無くなったコースも実際に跡地を訪ねて、「現存すればどんなだったのだろう」と想像するのが楽しい（笑）。

三田村 そういう人だから、学芸員の話振ってみたんですよ。

井手口 最初は冗談と思ってました（笑）。でも、何度か提案されたので調べてみると、確かに日本のゴルフ界には必要と思えて。ただ、私は高卒なので、大学に入らなければ取得できない。幸い、近くにある玉川大学の教育学部に通信課程があり、その学芸員コースを卒業すればいいことが分かり、働きながら大学の勉強をしました。

三田村 よくやりましたね（笑）。何年かかりました？

井手口 まる5年です。今年9月に卒業予定です。通信課程ですが、3分の1はスクーリング（対面）の授業でした。教員免許を取ろうという学生たちと一緒に、必死に勉強してる5年。自分ながらよくやったと思います。その代わり、この1年間はゴルフはまったくできませんでした。

「学芸員」が果たす役割

三田村 ところで学芸員とは、具体的にどのような仕事なのでしょう？

宮井 「博物館法」上は、「博物館資料の収集・保管・調査研究・展示をする専門職」です。

三田村 博物館といえば「展示」ですが、そこでは具体的にどんな仕事を？

宮井 まず、展示品の保存に責任を持たなければなりません。貸し出し・借り受けのある展示では双方の学芸員が展示品の現状をチェックし、搬出・搬入に立ち会い、貸出先でも同じ状態が保たれていることを確認。そして寸分たがわぬ状態で返却されるまで、すべての責任を負います。

井手口 貸し出す側は相手先に学芸員がいなければ、基本的に貸し出しをしません。ですから、JGAゴルフミュージアムが企画展を企画しても、学芸員がいなければ、他館から展示品を借りることはできないのです。

三田村 博物館に学芸員はマストなんですね。

宮井 はい。ただ、国内に「博物館」と称する施設は6000弱あるそうですが、「博物館法」に則った運営の施設はそのうちの2割程度。あとの8割は類似施設で、学芸員の存在は不明です。登録博物館になると様々な規制があるため、それを回避してのことでしょう。

三田村 JGAゴルフミュージアムの名前が出たところで、現状をどのように見えています？

宮井 もともと展示スペースは限られているので、学芸員の立場からすると、主な仕事は調査研究になると思います。そこで気になるのは、資料の保存状況です。保管場所の湿度や展示場所の照明は資料に大きなダメージを与えるので、少し心配です。



1920年頃に使用されていたヒッコリーシャフトのクラブ (JGAゴルフミュージアム内)

井手口 古い書物の修復作業は、学芸員の実習で習いました。和書は使われる糊が虫には美味しいらしく、洋書より虫食いに遇いやすいそうです。

三田村 ゴルフミュージアムの展示についてはなにか？

宮井 宮本留吉さんの工房はもっと見やすく展示したいですね。

三田村 倉庫には古いクラブや用具など、その時代を伝える貴重な品が多く埋もれているような気がします。今後は、新たな収集にも力を入れたいですね。

「歴史」を伝える意義

三田村 話は少し戻りますが、宮井さんが記録などのデータ収集と整理が大切と思ったのはどうして？

宮井 「歴史」は過去と未来の対話という言葉があります。過去を正確に知らないと、今を判断することも、未来を設計することもできません。スポーツの世界も同じで、過去の記録や先人の業績を知らずに、今を正しく伝えたり、未来を語ることはできないと考えています。

三田村 日本のゴルフ界は、数字や過去の記録を軽んじる傾向があります。残すべきスコアカードが保管されていなかったり。それを探し出す作業は大変な労苦でしょう。

宮井 正直、なかなか進みません。昔の新聞や雑誌を漁ってコツコツと調べています。国会図書館には何百回行ったか分かりません。1997年からですから、もう26年になりますが、全容を系統立てるには至っていません。まだ半分にも達していない感じです。

三田村 井手口さんは今年(2023年)、学校法人の東京ゴルフ専門学校でゴルフの歴史を講義されています。若い人たちに歴史を教える経験はどうでした？

井手口 驚きでした。ゴルフを始めて3年程度の若者のなかには、2018年までの肩の高さからのドロップを知らない人がいたんです(笑)。でも、歴史は何もしなければ時とともに忘れられるんですね。それで自分にも、と思い、ゴルフの歴史をもう一度学び直し、一緒に勉強できたのが楽しかったです。

三田村 講義で、ヒッコリーのクラブを打たせていましたね。

井手口 皆さん楽しそうでした。学芸員の立場から言えば、実物資料に実際に触れて、使ってもらうことは「博物館教育」なのです。



日本オープンで大会最多の6勝を挙げた宮本留吉の「宮本ゴルフ製作所」(JGAゴルフミュージアム内)

いまこそ歴史の継承に本腰を

三田村 「ゴルフの文化を伝える」と口で言うのは簡単ですが、実際にはきちんと継承されてこなかった。どこに原因があったと思います？

宮井 難しい問題ですね。もともと日本は欧米に比べ、ゴルフに限らず歴史を重んじない傾向があるかも知れません。例えば、海外のゴルフ選手と日本の選手を比べると、海外の選手のほうがゴルフの歴史に対する造詣が深いイメージがあります。1997年にタイガー・ウッズがマスターズで初優勝したとき、彼は今があるのはリー・エルダーを始め、アフリカ系の先人のお陰と発言しています。自分のバックボーンはアフリカ系ということ踏まえての感謝の言葉です。残念ながら、そのような言葉を日本の選手から聞いたことはありません。

三田村 1973年に全米オープン取材したとき、予選落ちした大学3年のベン・クレンショーが他の選手のプレーを見たいと、コースに残っていました。興味をもって話を聞いたら、彼の趣味はゴルフの古い書物を集めて読むことでした。数年後、プロになった彼が、全英オープンが終わったあと、会場のミュアフィールドを仲間たちとヒッコリーでプレーして、「ここは遊び場じゃない!」と怒られたことがありました。ゴルフの歴史を勉強する彼は、遊びではなく、心からリンクスをヒッコリーでプレーしたかったのでしょうか。

井手口 その気持ち、よく分かります。

三田村 日本のプロから「歴史」の話聞くことはほとんどありません。私にはいま、ゴルフの歴史や文化の継承に乗り出さないと手遅れになるという危機感があります。ちょうど来年(2024年)、「日本プロゴルフ殿堂」がプロゴルフという枠を取り除き、「日本ゴルフ



廣野ゴルフ倶楽部の敷地内にあるJGAゴルフミュージアム



貴重な展示物や資料が多数揃えられている (JGAゴルフミュージアム内)

殿堂」に姿を変えます。おふたりが学芸員になられたのは、本当によいタイミングで、歴史とそこで育まれた文化の継承に乗り出すいいきっかけになると思っています。

宮井 歴史・文化・記録を後世に正しく伝えるのは、我々の大事な使命だと思います。これからのジュニアにも、歴史やルールの変遷などを伝える態勢を作りたいです。

三田村 ゴルフには面白い逸話がたくさんあります。例えば、ゴルフコースはなぜ18ホールになったとか。

井手口 小瓶に入ったウイスキーをキャップに注いで飲みながらプレーしたら、18ホール目で空になった、という話ですね。

三田村 でもそれは、他にきちんとした史実があつての面白い逸話です。歴史を精査し、史実を明記する。それがおふたりの仕事なんだと思います。JGAは定款を変え、ゴルフの競技団体ではなく、文化も一般に伝える組織になりました。これからのJGAの活動には、おふたりの存在は欠かせません。今後、活躍の場は広がっていくと思います。どうぞよろしくお願いいたします。